慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	感性ワークショップ(アートにふれる・ 心にふれる)報告（8月4日 三田キャンパス東館6階G-SEC Lab)
Sub Title	Workshop for practicing sensibility : touching minds through art
Author	山根, 千明(Yamane, Chiaki)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.17, (2011. 10) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000017-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

感性ワークショップ（アートにふれる・心にふれる）報告

Workshop for Practicing Sensibility: Touching Minds through Art

（8月4日　三田キャンパス東館6階G-SEC Lab）

陽光あふれる夏休みのある日、心理学と美学美術史学との協働で「感性ワークショップ――つなぐ：線・色・形・人」が開催された。進行役は文学部准教授・川畑秀明（心理学専攻）、同・後藤文子（美学美術史学専攻）。アプローチは異なれど、アートが生まれる場に長く関わってきた両名による指導のもと、一般より広く募集した参加者20余名が、20世紀スイスの画家パウル・クレー（1879-1940）の造形理論に挑戦した。

3時間にわたるワークショップは、一度の休憩を挟む3部から構成された。参加者は無作為にグループ分けされ、人体を楽器に変換する玩具「にんげんがっき（タカラトミー）」で遊んで緊張を解いた後、第1部では後藤によるレクチャーおよび《島》（1932年）の鑑賞を通してクレーの造形理論を確認した。20世紀初頭のドイツの造形学校バウハウスでの講義録『造形理論ノート』において、クレーは音楽体験をイメージへ転化する手法を示す。今回はその一部を取り上げ、筆者によるヴァイオリンの実演を交えて音やリズムから生じる運動を形に置き換える手続きを体験した。これを踏まえ、第2部では用意されたさまざまな楽器を参加者自身が選択して組み合わせ、グループごとに《島》を音とリズムに置き換えた。最後に第3部では《島》から生まれた音が、参加者一人ひとりによって、再び紙の上の形へ置き換えられた。

以上のとおり、限られた時間の中でさまざまに非日常的な創造が要求されるワークショップであった。ところが参加者の創造力は、その要求を上回って豊かだった。アートに関心があるとはいえ、芸術制作に慣れているわけではない。抽象画を契機とする即興演奏など尚更である。にもかかわらず、自由な遊びを通じて新しい演奏アイデアを次々に生みだし、手が真っ黒になるのも構わず、時間が来てもなかなか紙から顔を上げないほどの没頭ぶりであった。「音楽と形」をつなぎ、さらに「人と人」とをつなぐ――「にんげんがっき」の試奏に始まり即興演奏、そして造形に至るまで、じつは本ワークショップは二重の目的をもって企画されていた。3.11をきっかけに、個別化の一途を突き進んできた現代生活のあり方が問い直され始めた今、日常生活とは一見かけ離れて見えるアートこそ、あらゆる人に創造と共感の可能性を開きうる、と身を以て確信された一日となった。（山根千明）

Workshop for Practicing Sensibility, lead by asst. Professor Hideaki Kawabata and asst. Professor Fumiko Goto, proved the art theory of Paul Klee and the potential of art for common experience.

慶應義塾大学英語教育シンポジウム

学習英文法～日本人の英語学習にふさわしい英文法の姿を探る～

Keio University Symposium on English Education: Searching for What Should Be Involved in a Suitable Pedagogical Grammar of English for Japanese English Learners

（9月10日　日吉キャンパス独立館DB201）

2011年9月10日に慶應義塾大学英語教育シンポジウム「学習英文法～日本人の英語学習にふさわしい英文法の姿を探る～」が開催された。本シンポジウムは今回で9回目を迎えるが、今回は「コミュニケーション指向」の英語教育の中で軽視されがちな学習英文法の意義について、理論と実践の両面から検討された。

第一部で、江利川春雄氏（和歌山大学）、斎藤兆史氏（東京大学）、鳥飼玖美子氏（文教大学）、田地野彰氏（京都大学）、山岡大基氏（広島大学付属福山中・高等学校）、大津由紀雄氏（慶應義塾大学）による講演があった。第二部では、柳瀬陽介氏（広島大学）、久保野雅史氏（神奈川大学）、松井孝志氏（山口県鴻城高等学校）による講演があり、その後安井稔氏（東北大学名誉教授）よりコメントをいただいた後、発表者間討論、全体討論に入った。第二部の全体討論は、フロアから集めた質問に登壇者が答える形で進められ、幅広い議論が行われた。汗の滲む会場にて6時間を超える長丁場であったにも関わらず、大盛況のうちにシンポジウムは終了した。

ただ、このような会が真に成功したと言えるのは、大盛況のうちに終了した場合でも、登壇者が主張した考え方・内容・方法がそのまま世に広まり、そのまま実行に移された場合でもない。各々の主張内容が叩き台となり、関係各所が自身の現状に照らして盛んに議論するきっかけを作れたかどうかこそが、成功したかどうかを決める最も重要な点である。会終了後、反響が様々な場で起こっているようで（詳細は大津研ブログ（http://oyukio.blogspot.com/）等を参照されたい）、この点において、本シンポジウムは成功を収めたと言える。

当日配布したハンドブック原稿・資料、スライド、シンポジウム全体の詳細な報告記事は、大津研究室ウェブサイト（http://www.otsu.icl.keio.ac.jp/）、またはブログに掲載してあるので、是非参照されたい。また、今回のシンポジウムをもとにした単行本が、来年研究社より出版される予定である。（桃生朋子）

The Keio University Symposium on English Teaching was held on September 10, 2011. It focused on a pedagogical grammar of English in a Japanese EFL environment.